

富田芳郎 著

「台湾地形発達史の研究」

竹内 常行

富田芳郎博士は旧台北帝国大学、東北大学、日本大学教授を歴任されて、現在本学の教授であられ、また学界においては、全日本の地理学者が組織し、国際的にも全日本の地理学界を代表する日本地理学会の元会長、現在同学会名誉会員であられ、名実ともに、日本地理学界の碩学である。ここで紹介する「台湾地形発達史の研究」は、まさに先生のライフワークであって、もともと研究活動の旺盛であられた時代の研究成果をまとめられたものである。このような偉大な先生の御業績を私如きが紹介できるものでないことは重々承知しているけれども、私は昭和四六年、台湾に出張する機会があって、かねて興味をもっていた嘉南平野と、桃園台地の水利の発達と土地利用の進展の関係を調査し、それらの研究成果を、日本地理学会の機関誌である「地理学評論」早稲田大学教育学部紀要「学術研究」に発表するに当り、富田先生の御宅に御邪魔して、親しく台湾の台地地形、扇状地地形、河川水系の特色などについて御教示を戴いた際、本書がやがて古今書院から出版されることになっているということをお聞きしていた関係もあり、また本学文学部長尾形裕康博士は、早稲田大学教育学部の長老教授であられた時期に、種々御指導を戴いたが、その尾形先生の御すすめもあって、本書の御紹介という、私にとっては誠に重荷ではあるが、光栄なことであるので、敢えて御引き受けた次第である。

富田先生は昭和六年から三十二年まで、台北帝大に勤務されていたが、その間、自然・人文の領域にわたって、数々の優れた研究成果をあげられた。そのうち

もつとも重要な研究であつた台湾地形発達史の全容が、まとめられて出版されたことは、今後先生のように、じっくりと台湾の研究に打込むことが、日本の地理学者にとって、ほとんど不可能と思われる現在、誠に学界のために慶賀すべきことであると思ふにつけ、先生から直接お聞きしたこともあるので、刊行にいたつた経過に触れておきたい。

昭和二〇年八月一日、ポツダム宣言受諾とともに、台北帝大は中華民國政府の管理下に入ったが、中国軍の何応欣司令官の方針によつて、大学は従来通りの組織で活動することが認められた。それで大学の正門の左側の柱には、元通り台北帝国大学の標札が、右の柱に国立台湾大学校の標札が掲げられていた。教官も「敦聘」の辞令で、聘用（註・礼をあつくして任用すること）されて、研究・教育が続けられたのであつた。かねて提出されていた富田先生の学位論文、即ち本書の原稿の基礎をなす論文は、戦後のこの期間に審査されて理学博士の学位を得られたのであつた。したがつて次のような幸運がなかつたならば、この論文は中国の管理下に入った台湾大学に納められたまま、日本には帰らなかつた運命にあつたかも知れないのである。しかし幸にして、日本側の台北大学本部が引揚げた後も、四年間台湾大学に残られた早坂一郎教授が、引揚げ帰国された際に、早坂博士の才覚によつて、正副二通を携行されたのであつた。ところで戦時中の制約があつたので、この学位論文には、地形図の掲載が省略されていた。地形図なしには記述の理解が困難であつたから、そのままでは出版され難いものであつた。しかしここにも幸運があつた。戦後得難くなつた地形図や、台湾に残された資料が先生の教え子の協力によつて、先生の入手されるところとなつて、一般にも理解され易い形となつて、本書出版の運びになつたのであつた。

扱て本書は七章で構成されている。第一章の緒論においては、はじめに台湾の地形的特徴を簡潔に述べ、次いで台湾の地形学的研究に関する戦前の業績を

概観し、戦後発表された業績としては、富田教授の教え子で、現在国立台湾大学の林朝榮教授の四篇の文献があげられている。第二章地形発達史概説では、まず著者の台湾の地形発達史研究の目的を明らかにされている。それは台湾に発達する地形群全般について、その形成や変遷を究め、これら地形群における各種地形面の対比を行なつて、各種地形形成の前後新旧を論じて、台湾の地形がいかなる地形的変遷を経て、今日にいたつたかを明らかにすることである。次いで地形発達史研究における理論的根拠として、有名なデーヴィスの地形輪廻説と、これに対する有力な批判学説としてのペンク父子の地形分析論との論争を検討され、これらの学説の上に立つて、著者の地形発達史についての見解を明示されている。

第三章河谷地形各論は、先生のもつとも詳しく調査研究された成果の報告であることは、本章の記述が二三九頁に及び、実に本書の七章の全頁のうち六五パーセントを占めていることによつて察知できる。その叙述された水系は主要河川全部に及び、一水系に一項をあてて叙述されている水系は一九水系であり、他に台東地溝帯の四水系、南部東斜面の七水系にも及んでいる。なおこの章の最後に台東山脈の地形の一項が付加されている。

これらの水系のうち、淡水河に二八頁、濁水溪に二五頁、タツギリ溪に二二頁、大甲溪に二〇頁、曾文溪に一七頁を費し、他の小水系についても数頁づつをあてて、詳細に記述されている。これらの水系毎に、流路配置、段丘、扇状地、緩起伏面、丘陵などについて説明されているが、単なる地形誌ではなく、先生の創意による地形面、即ち低位平坦面、高位平坦面、礫土緩起伏面、高山平夷面などの地形面の分類、河成段丘の分類、曲流型と段丘配置などの考えを適用して叙述されている。本章にはとくに多くの先生御自身のペンによるスケッチ、写真、並に適切な地形図のカットが挿入されて、理解を助けている。

第四章河谷地形総論では、前章の各河系別に述べられた河谷地形を、河成段

丘、扇状地、曲流、河床縦断曲線別にまとめ、それぞれの地形の台湾地形発達史における意義が論じられている。第五章の台地地形論では、はじめに簡単に台地地形の分布などを述べ、次に台地地形各論として、台湾西部の北の大屯山麓台地帯、桃園台地帯から南端の恒春台地帯までの二一の台地帯、数は少ないが東部の六つの台地帯、合計二七の台地帯について、それぞれ叙述し、最後に台地地形総説として台湾台地地形の特徴をあげ、その形成について論じられている。

以上のうち第三、四、五章の河谷地形の各論と総論、及び台地地形論の三章で、実に本書の九四%を占めている。これらの地形は、また人間生活の舞台となっており、人文地理学のみならず、具体的な台湾の社会経済問題を扱う学問分野の学者にとっても、極めて有益であると思う。工学的分野における有用性については云うまでもない。

第六章高山地形とその地質構造は極めて簡潔で、第七章は結論の章となっている。

以上本書の内容を読むと、富田先生の台湾における踏査の足跡は全島に及んでいるのに驚嘆するものであり、その踏査によって、例えば段丘にしても比高、高度、堆積物がすべて記録されて、貴重な資料を提供している。今後台湾の地形を研究する学徒にとっては、必読の書として、永遠の生命を保つものと思われる。台湾の日本語の解る若い学徒が、本書を中国語に翻訳して、優れた日本の学者が残された業績を土台として、無駄のない研究を進めることを希望する。

なお本書には、所々に踏査の時の思い出や人文地理の記事、例えば切替畑の事などが含まれ、本文とは別の一〇頁に及ぶ自序の文章とともに、誠に貴重な先生独特のユーモアに富んだ経験談も盛り込まれている。先生には、日本地理学界の耆宿として益々お元気の後輩を見守って下さるようお願いする。

(早稲田大学教授・理学博士・地理学)

「台湾地形発達史の研究」(A5版三七〇頁三〇〇〇円・古今書院刊)